

とやまの気づかれにくい方言

Toyama Dialects perceived as 'Standard Japanese'

山田 敏 弘
YAMADA Toshihiro

1. はじめに

マスメディアの発達と学校教育により地方で話されることばはその独自に保持してきた特徴を急激に捨て去ろうとしている。富山県は各市町村ごと独自に編まれた方言語彙集が多く刊行されている土地であるが、その多くにすでに老年層でもほとんど用いないような「絶滅してしまった」語彙が納められている。

一方で他の地方からその地方へと足を踏み入れた者にとって、日々ことばに関する発見があるのも事実である。それは文末近く、モダリティ表現と呼ばれる話し手の気持ちを表す部分に現れることが多いが、名詞や動詞といった語彙の面でも少なくない。

名詞や動詞などの実質的な意味を強く持つ語彙については、大勢として全国的な均一化への動きは否定しないが、ある部分で強く地方的な特色を保持している分野もある。それは学校や家庭などの場面に限定して使用される語彙である。このような語彙は使用場面が限定されているため、他の地域で使用される語彙と比較されることが少なく、相対的に気づかれにくいものとなっている。特に小学校などで使用される語彙は大学生として他の地域との学生と交流ができる頃にはすでにその語彙が指すものを日常使わなくなるため、大人になってから意識に上り比較することが多くない。

今回、富山で生活する中で得たこのような気づかれにくい方言語彙について、富山大学、富山国際大学、富山市民大学で小調査を行った。本稿ではこの結果を示し、若干の考察を行っていく。

2. 調査の対象と方法

身近に存在する気づかれにくい方言を中心に今回は次のような語彙について調査を行った。なお、「(ホッチキスの針、(消しゴムの)カス」など一部を除いてここで挙げる名称は小学館発行林巨樹監修の『現代国語例解辞典』によるものである。

名詞：模造紙、(ホッチキスの)針、(消しゴムの)カス、(歌の歌詞の)一番...、学区

動詞：(机を後ろに持ち上げて)運ぶ、(お風呂で肩まで湯に)つかる、(鍵を)かける、(ご飯を茶碗に)よそう、
(小銭に)くずす、(給料を)もらう、入っている

文法的要素：掲示板に「休講」と書いている、「今から家へおいで」と言われて「なら、すぐ来るよ」

発音・読み方：福神漬け、自転車、三羽、何羽、三階、何階、来れば、十分、敷く

調査は富山国際大学人文学部(現 人文社会学部)の山田の担当する日本語研究等の時間において何回かに渡って予備調査を行った上で、本調査を2000年1月18日と25日に富山大学において行った。富山大学で本調査を行

った理由は大教室で一度に大勢の被調査者が得られることによるもので、富山県内出身者を中心に1月18日の調査が129名、25日の調査が144名に対して調査を行うことができた。なお、今回用いるデータは上記人数に対する全体的なもの、富山県内出身者に限定したものの両方である。富山県内出身者については18日の調査が42名、25日の調査が44名を対象とする。

また2000年10月20日に行った富山市民大学での中高年の方25名に対する補助的な調査の結果も参考までに示す。

調査の方法は、実物もしくは絵を見せて名詞や動詞をどう表現するかを自由回答によって答えてもらう方式と、ある表現について 自分でも使ったり聞いたりするかどうかと その表現が共通語であると認識しているかどうかを選択肢に を付けてもらう方式をあわせて用いた。なお複数回答をしたものについては複数の回答の箇所を数えてある。

3. 「どう呼ぶか」に関する調査

今回、129名を対象に次の名詞や動詞をどのように表現するか調査した。名詞は実物を見せて、動詞は絵を見て答える方式を採った。

- 模造紙、ホッチキスの針、消しゴムのカス；(机を後ろに持ち上げて)運ぶ、
- (お風呂で肩まで湯に)つかる、(鍵を)かける、(ご飯を茶碗に)よそう、(小銭に)くずす

3.1 県内外で呼び名に関して大きな違いが観察された語

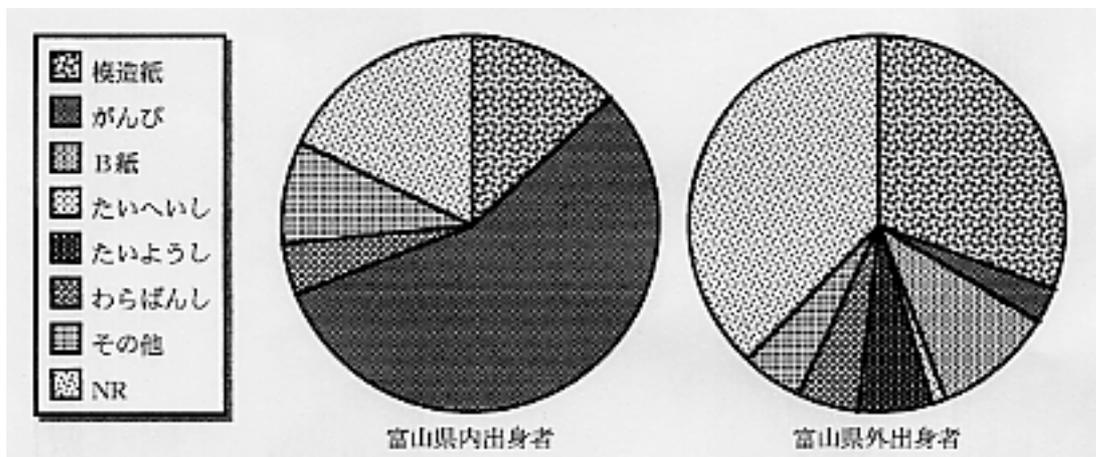
(1) 模造紙

小学校などの教室で掲示板に目標や各種当番のリストを書いて貼るためのB全紙大の紙は、全国的に「模造紙」の名前で呼ばれている。

この「模造紙」は富山県内で広く「がんび」の名前で呼ばれる。「がんび」は広辞苑に「ジンチョウゲ科の落葉低木。西日本の山地に自生。(中略) 樹皮の繊維は和紙の原料。紙の木。」とあり、紙の原材料の名である。

今回の調査からは以下のグラフが示すように「がんび」は富山県内出身者の約半数で使われている一方、県外出身者については石川県と長野県出身者から1例ずつの回答が得られたのみであった。

グラフ(1) 模造紙



富山県内で他に特徴的なのは「その他」に「方眼(用)紙」の回答が2例見られたことであった。これは書きやすいように方眼が印刷されている模造紙が特に使われていたためであるとのことである。

この「がんび」は学校に導入された時期を考えるとあまり古くから使われていた方言ではないようで、富山

市民大学における調査では50歳代以下に散見されるものの少数派で「全紙、ケント(ウ)紙」などの回答も見られた。

(2) お金をくずす

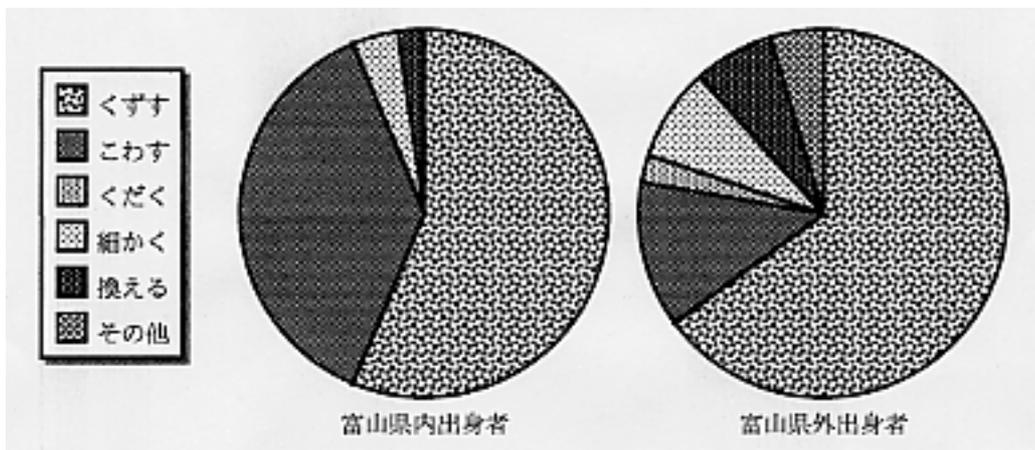
富山弁に関するエピソードを集めた『富山弁大語(誤)解』(シーエーピー刊 1989年)に次のような話載っている(p.196)。

「(大阪の)たばこ屋さんで千円札を出して、『これこわしてください』といたら、おばちゃんに変な顔をされ、はじめてこれが標準語でないことを知りました。」

今回、富山県内出身者の約4割の回答者から「こわす」という言い方が得られた。富山県内出身者の半数以上が共通語的な「くずす」を回答しているのは事実としても、これは右に示した県外出身者の回答と比べると大きく異なっている。

富山県外出身者で「こわす」を回答したものは福井、石川、岐阜、愛知に散見されるが、これらの地域においても「くずす」が多数派で「こわす」はやや少数派となっている。

グラフ(2) お金をくずす



なお、富山市民大学で中高年の方に同様の調査を行ったところ、やはり「こわす」という回答が最も多く25名中15名が使っていることが観察された。やはり割合としては減る傾向にあることが見て取れる。

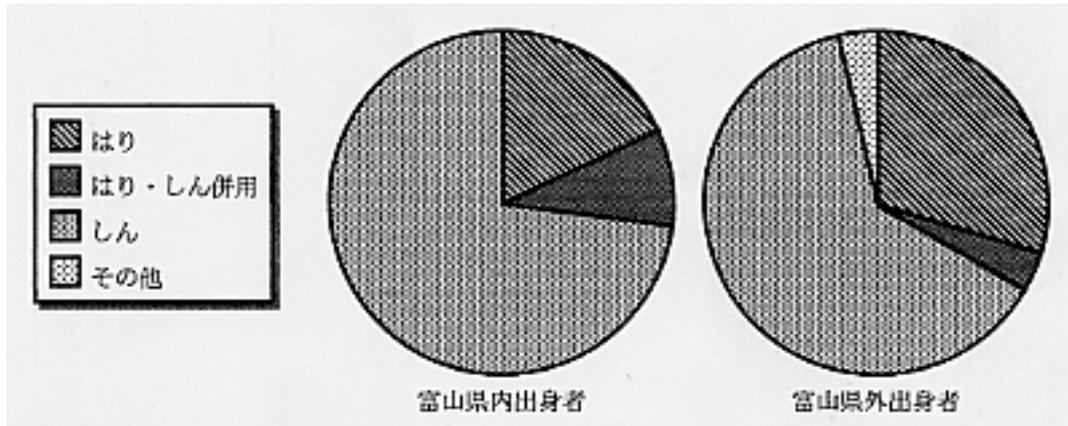
3.2 県内外で特に特徴に差が見られなかった語

今回語彙を自由回答で回答してもらったものの中で「ホッチキスの針」、「消しゴムのカス」、「机を後ろに持ち上げて運ぶ」、「(お風呂で)肩まで湯につかる」、「(鍵を)かける」、「(ご飯を茶碗に)よそう」については特に特徴的と言える差は見られなかった。

(1) ホッチキスのしん

ホッチキスのいわゆる「しん」については、富山県内出身者の間で「はり」がやや県外出身者よりも割合が小さいとは言え、全体として特に県内外の違いは観察されなかった。

グラフ(3) ホッチキスのしん



県外出身者に見られるその他の回答としては「歯」が2件、「玉」が1件見られた。また、上のグラフでも示したようにいくつかの形式を併用するパターンもかなりあると見られる。

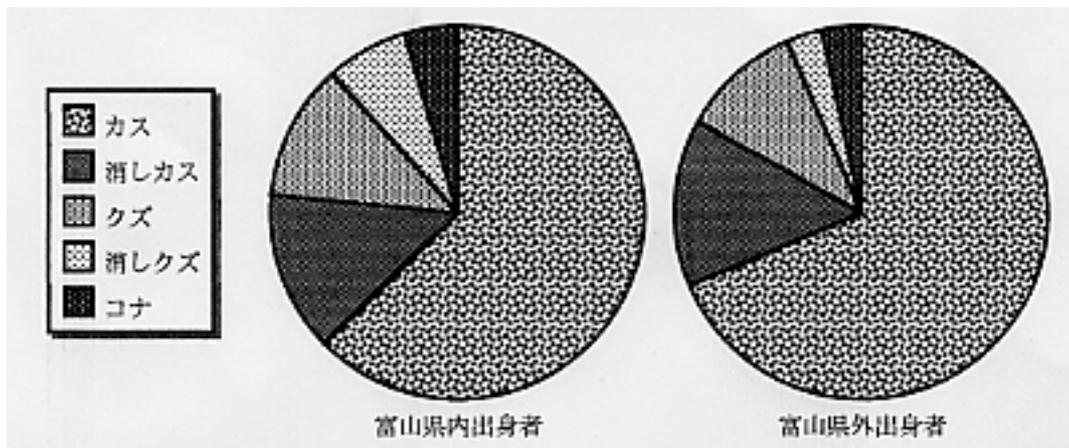
中高年層の回答としては「針」が最も多く25名中14名が使用。この結果は上の富山大学での調査とは大きく違っている。他に、「ツメ、タマ、タネ、クギ、ツメガネ、トメガネ」などの回答が得られた。時代的な変遷としては「針」「しん」へ大きく流れていくのと同時に小さな形式が淘汰されていったパターンであると考えられる。

(2) 消しゴムのカス

消しゴムで鉛筆の文字を消してできるカスについても県内外で大きな差は見られなかった。敢えて言えば富山県内では「クズ系」がやや多いが大きな違いではない。

岐阜県出身の筆者は「コナ」という語を使っていたが県内では富山市と高岡市の各1名から「コナ」という回答が得られたほか、石川県内でも3名が「コナ」を挙げた。

グラフ(4) 消しゴムのカス



市民大学での調査からは「クズ」が最も多く25名中10名、次いで「カス」が7名という結果が得られた。ここから「クズ」「カス」へと少しずつ移行しているという傾向が観察された。ちなみに「コナ」も2名から回答が得られた。

(3) (ご飯を)よそう

特に県内外出身者の間での差は観察されなかったが、年代的な差が大きかった語として「(ご飯を)よそう」が挙げられる。県内外を比較する円グラフは省略するが、特に「ご飯をもる」という言い方は富山県外出身者の方が県内出身者よりも割合として多く、富山県内出身者としては43名中2名のみが回答したのみであった。

一方、富山市民大学受講生25名からは10名が「もる」を回答しており、若年層との差はやや大きいと考えられる。

(4) その他

「(机を後ろに持ち上げて)運ぶ」、「(お風呂で肩まで湯に)つかる」、「(鍵を)かける」については特に富山県内外の使用について差異を想定したわけではなく、むしろ岐阜県などでの使用実体の調査を意図したものであったため、富山県の気づかない方言としては特に特徴的なことは観察されなかった。

4. 「使うか」と「方言だと思うか」についての調査

ここでは気づかれにくい方言語彙の使用と方言意識との関連についての考察を行う。

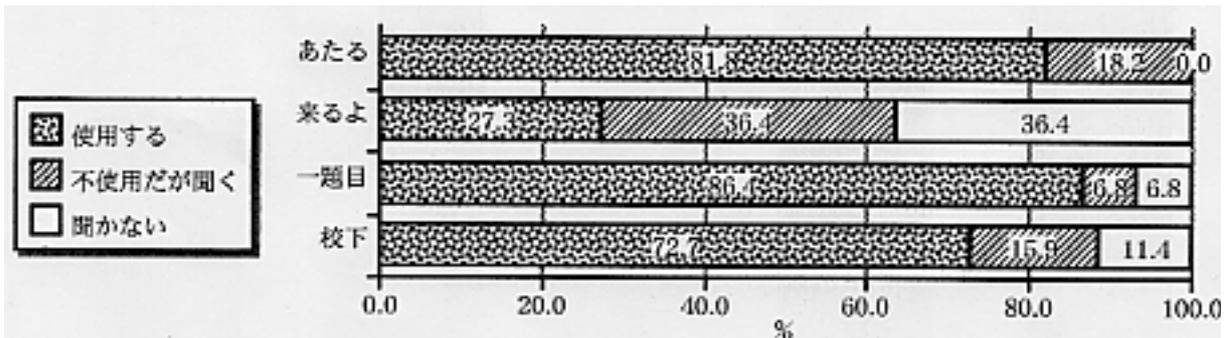
調査した語彙のうち富山県内での使用が特に問題となるのは「給料があたる(もらえる)」、「(「今から家へおいで」という誘いに対して)なら、すぐ来るよ(行くよ)」、「歌の歌詞の一題目(一番)」、「校下(学区)」である(かっこの中は対応する共通語)。

ここで挙げた4つの語彙はいずれも共通語に同じ語形が存在するものか漢語語彙であるものである。これらの語彙は富山県内出身者の間での使用率が「来るよ」がやや低いものの総じて高い。

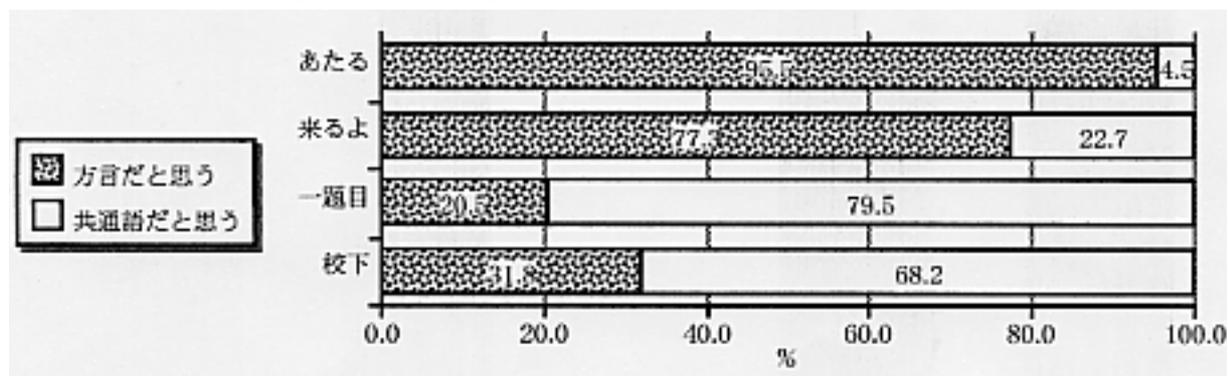
とりわけ「(給料が)あたる」は高く富山県内出身者の全員が使用するかもしくは不使用であるが聞くと答えている。また「一題目」「校下」に関してもその使用率はきわめて高い。

興味深いのはこれらの語彙に対する意識である。

グラフ(5) 語彙の使用(富山県内出身者)



グラフ(6) 方言意識(富山県内出身者)



グラフ5とグラフ6を比較して興味深いのは「一題目」や「校下」についてはこれらの語彙が共通語であると思って使用している、すなわち共通語と勘違いしているために使用率が高くなっているのに対して、「あたる」は方言だという意識が高いにも関わらず富山県内での使用率が非常に高いという事実である。

方言というものがすべて悪いものであり恥ずかしいものという意識があるとすれば、その話者は次第に方言語彙を共通語語彙に置き換えようとする。「一題目」や「校下」については、共通語語彙であるという意識が逆にこれらの語彙の使用を支えているとも考えることができる。

しかしながら「あたる」に関してはそうではない。方言意識があるにも関わらずその使用は共通語語彙によって置き換えられていく方向に少なくとも現時点ではない。では、なぜ「あたる」は方言意識がありながら共通語に置き換えられていかないのであろうか。

この「あたる」は簡単に言えば「もらえる」であるが、「給料があたる」の他「給食でプリンあたった」のように共通語としては「もらえる」が使えない(この場合「給食でプリンが出た」であろう)場合であっても使える点で、授受という出来事を受け手の立場からより広く表現できる動詞である。このような使用領域の広さによる便利さが方言的語彙でありかつその意識がありながら、高い使用率を保っている要因と考えられる。

このような「あたる」の他には、山田敏弘(2000)で報告した「だら(ばか)」や「だやい(しんどい)」が方言意識がありながら高い使用率を保っている方言語彙として挙げられる。しかしながらこれらの語彙が若者ことば的な「ノリ」に依存する面が強いものに対して「あたる」はそのような「ノリ」による使用とは考えにくく、この点についてはさらなる調査が必要である。

なお、今回、他に「はってる(入ってる)」、「鍵をかう(かける)」、「机をつる(運ぶ)」、「風呂で肩までしずむ(つかる)」についても調査したが、いずれも富山県内での使用率はきわめて低かった。以下、簡単に数字だけを示しておく。

(人)	使用する	不使用だが聞く	聞かない	方言だと思う	共通語だと思う
はってる(入ってる)	1	5	38	42	0
かう(かける)	1	2	41	44	0
つる(運ぶ)	7	9	28	40	4
しずむ(つかる)	7	8	28	32	11

表(1) その他の語彙の使用率と方言意識

5. 「どう読むか」に関する調査

共通語と同じ語形でもその発音が違うものも気づかれにくい方言として問題となる。富山県内ではよく「自転車」や「洗濯」の読み方が問題となり、いずれも共通語では清音として「じてんしゃ」「せんたく」と読ま

れるところが富山県内では「じてんしゃ」「せんだく」と濁音で発音されることが取り上げられる。

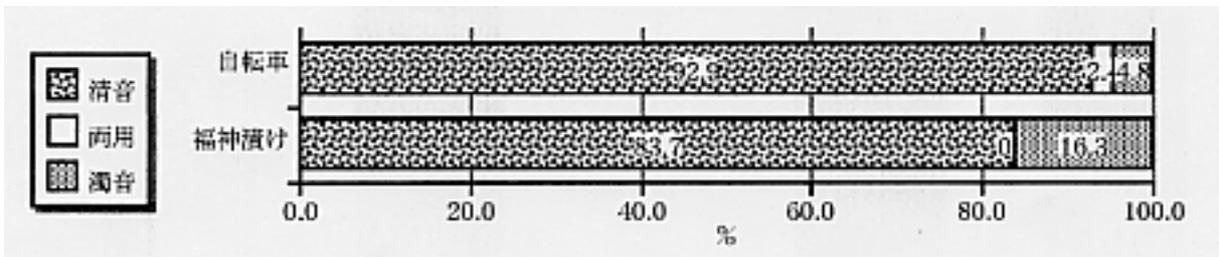
今回、この「自転車」に加え気づかれにくい方言として「福神漬け」と、「何羽、三羽」「何階、三階」という助数詞を伴うものの読み方、それに「来れば」という動詞の活用形についても調査を行った。

(1) 「自転車」と「福神漬け」の読み方

「自転車」は共通語では「じてんしゃ」と清音で読まれるが富山方言では「じてんしゃ」と濁音で読まれることが多いことでよく知られた語である。一方、「福神漬け」は共通語では「ふくじんづけ」であるが富山方言では「ふくしんづけ」と清音で読まれるという逆の現象が見られる。

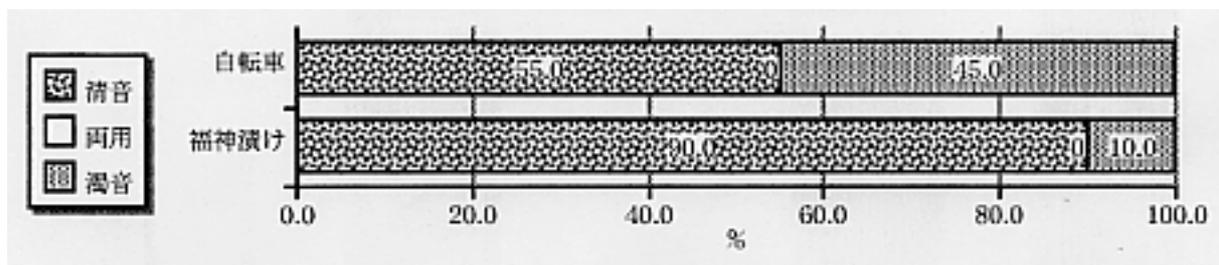
今回の富山大学での調査では県内出身者のほとんどは「自転車」は「じてんしゃ」と清音で読んでいた。一方、「福神漬け」は「ふくしんづけ」とこれまた清音で読むことが多かった。

グラフ(7) 音の清濁(若年層富山県内出身者)



一方で市民大学の県内出身者20名からの回答は回答者数もやや少なく参考程度でしかないが、「自転車」を「じてんしゃ」と濁音で読む割合が高くなっている一方、「福神漬け」については若年層と同様、高率で「ふくしんづけ」と清音で読むという結果を得た。

このことから「自転車」は、学校教育によるものであれワープロの変換による学習であれ、濁音で読むことグラフ(8) 音の清濁(中高年富山県内出身者)



が方言であると意識されたために、伝統的な濁音「じてんしゃ」から清音「じてんしゃ」へと移行していったのに対して、「福神漬け」の方は学校教育で読み方を書かされることもなく、またワープロで変換することも少ないためにまだまだ方言としての清音読みが意識されておらず、そのために保持されているものと考えられる。

(2) 助数詞「羽」と「階」を含む読み方

助数詞「羽」と「階」は、特に「三」という数詞と「何(なん)」という不定数詞が付いた場合にその読み方が問題となる。

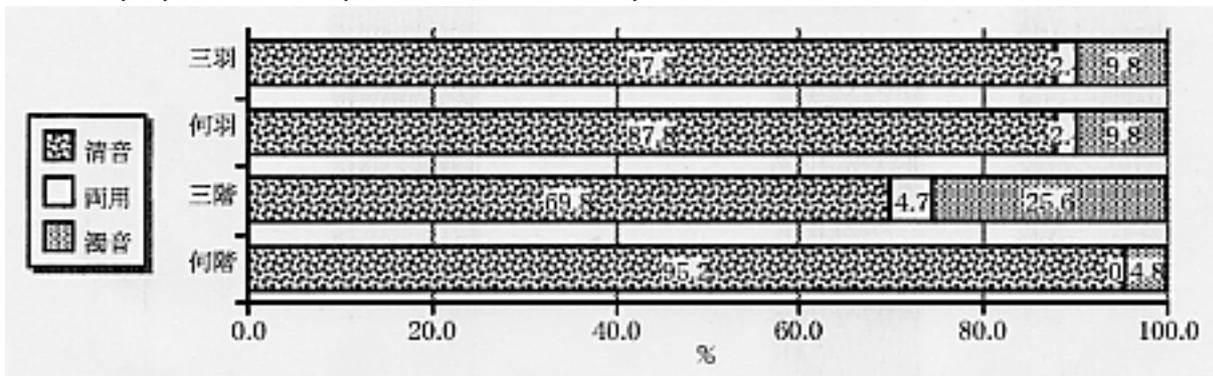
NHK放送文化研究所編『新版日本語発音アクセント辞典』によると「羽」は「三」については「さんば

(さんわ)」と両形並記されている。「階」についても「さんがい(ただし「が」は鼻濁音)」の記述がある。「何」については「羽」「階」どちらについても記述はないが、通常考えれば「四」に続く場合と同じ読み方をすると考えられるから「なんわ」「なんかい」であろう(パソコン用辞書であるATOK13でも「なんわ」「なんかい」が通常の読み方として登録されている)。

今回、これらの読み方を調査してみて興味深い事実が見て取れた。

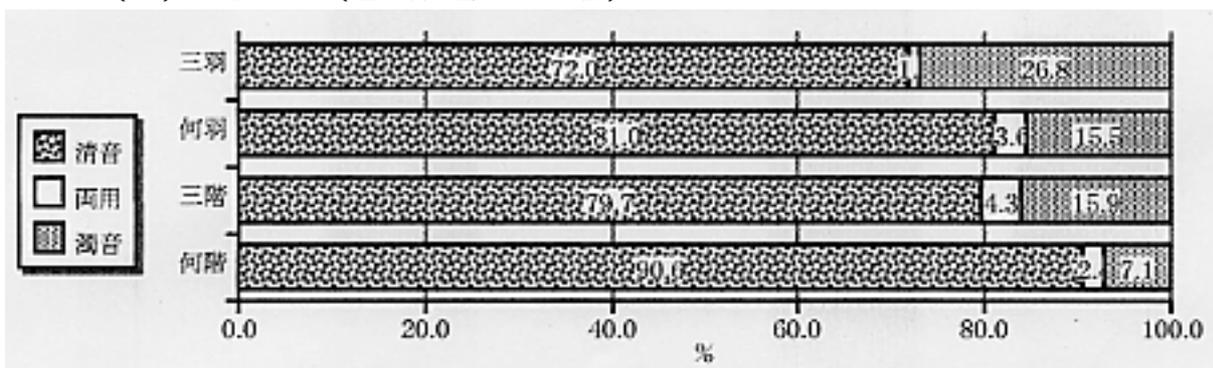
県内出身者のうち若年層については、「三階」でやや濁音が多いが概してすべて清音で発音する、すなわち「さんわ、なんわ」「さんかい、なんかい」と発音する傾向が強い。

これは富山県内出身者に限った傾向ではない。今回、調査した県外出身者のデータはやや石川県などの中部グラフ(9)助数詞の清濁(若年層富山県内の出身者)



県内の出身者が多いが似通った傾向が見られた。

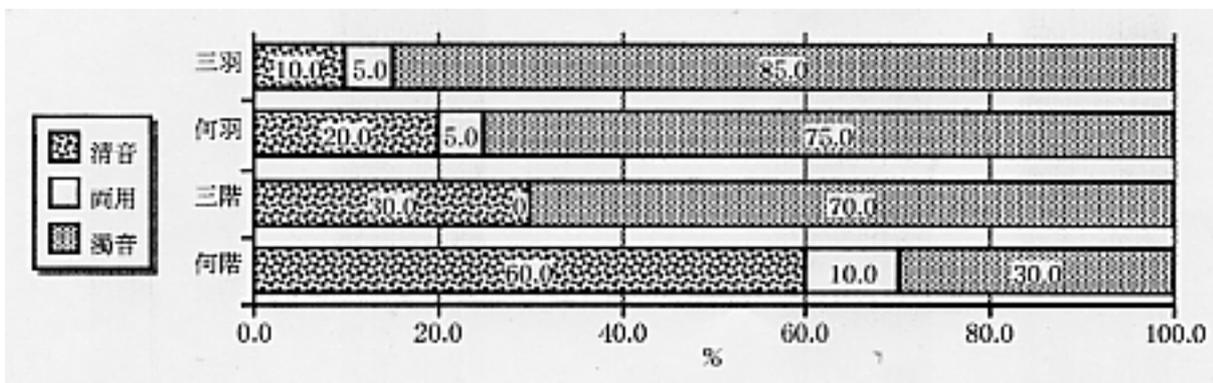
特に「三羽」については県外出身者に「さんば」と濁音になる傾向がやや強く見られるが、概して清音で発音される傾向が強いのが見て取れる。



音される傾向が強いのが見て取れる。

一方で富山県内出身者の変遷とも言える中高年層のデータを見てみると様相は一変する。

ここから分かることは富山県では「さんば、なんば、さんがい」という濁音での発音が伝統的にあり、それ



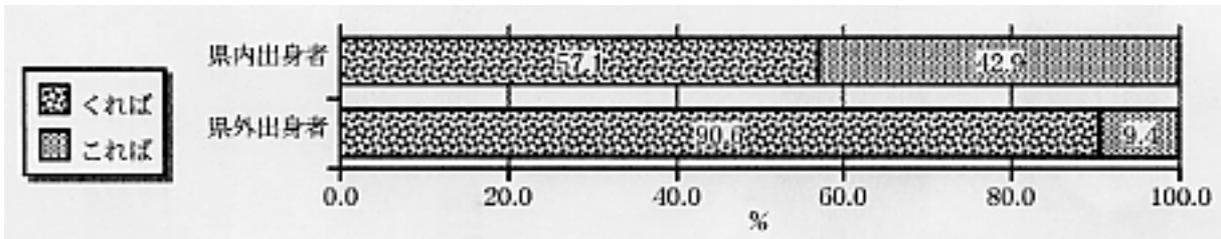
が清音へと移行する傾向にあるということである。特に「三羽」や「三階」など特に清音にする必要がないものまで過剰一般化とも考えられる清音化が広がっていることは驚きである。

(3) 「来れば」の読み方

カ行変格活用とされる「来る」は条件形として「来れば」の形を取る。これは共通語では「くれば」であり「これば」ではない。「これば」というのは方言としての条件形「こりゃ」などに牽引された形であり、「書かなかった」と「書かなんだ」から生まれた新方言「書かんかった」と同様の生成過程を経ているものと考えられる。

今回、この「来れば」について読み方を問うた。県内出身者と県外出身者とを比較する。

グラフ(12)「来れば」の読み方1-県内外の比較

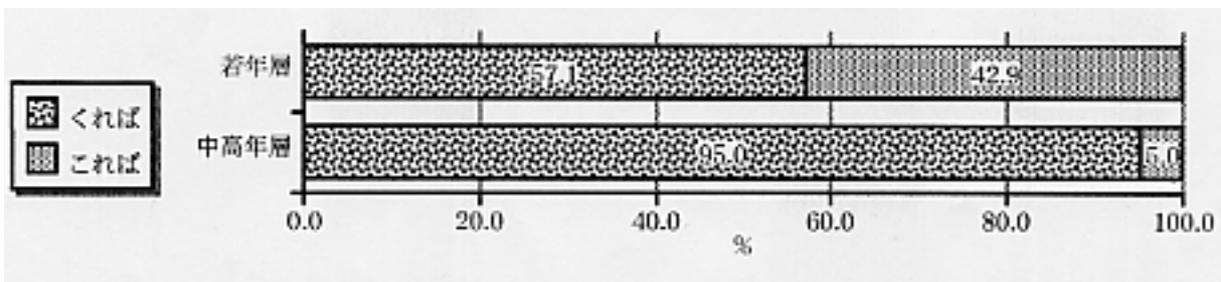


今回の富山大学における調査は県外出身者についても石川県をはじめとした中部圏内出身者が多く、県外出身者の回答がそのまま全国的な傾向とは言えないかもしれない。しかしながらグラフ12に示したように、富山県内出身者について「これば」という読み方が多く回答されていることが分かる。

この傾向は実は富山県の伝統的な読み方ではない。金森久二(1931)における滑川町(現在の滑川市)の動詞活用表にも「来る」の仮定形として「くりゃ」が挙げられているように、伝統的に富山県の「来る」の条件形は語幹に「こ」ではなく「く」が来る。

今回の市民大学での調査は人数こそ少ないが、この金森(1931)の記述を裏付けるものである。

グラフ(13)「来れば」の読み方2-年代別の比較



すなわち若年層は新しく「これば」という新方言の条件形を得るに至ったのである。これが県外出身者の影響かどうかはこの段階では判断できない。今後さらなる調査が必要である。

6. おわりに

今回は調査結果をもとに富山の「気づかれにくい方言」を考察した。調査にも考察にも十分な時間が掛けられず、全国各地で行われている「気づかれにくい方言・気づきにくい方言」が富山ではどうかという観察をしただけの論考しかできなかったが、実際には気づいていながらも使っている方言や新たに生み出されていく方

言もあり、方言の底力の強さを感じないではいられなかった。

また、今回は県内外というように二分するだけで富山県内での分布については述べてこなかったが、すでに紙幅も尽きてしまった。機会があれば報告していきたい。

今後もこのような方言が未来の富山方言を形成する一要素となっていく可能性が高い。継続した調査が望まれる。

参考文献

沖裕子(1999)「気がつきにくい方言」『日本語学臨時増刊号 地域方言と社会方言』明治書院

金森久二(1931)『越中方言研究彙報』第二輯 私家版

山田敏弘(2000)「富山方言の語彙・文法的特徴について～富山市を中心とした方言話者に対する調査から」『富山国際大学人文学部紀要』10